

日本語とスペイン語の主題と主語

寺崎英樹 (東京外国語大学名誉教授)

【キーワード】 主題、トピック、主語、日本語、スペイン語

1. はじめに*

類型論的に見ると、日本語は主題 (題目) 卓越言語、スペイン語は主語卓越言語とされる。本来、主題の概念は文の情報機能にかかわり、主語の概念は統語機能にかかわるもので分析レベルを異にするが、どちらの言語でも主題と主語は文の表面上で交錯して現れると考えることができる。しかし、日本語には主題を表示する助詞「は」と主格 (主語) を表示する助詞「が」が並立するのに対し、スペイン語には「は」のような主題を示す特定の形態標識はなく、人称代名詞を除くと主語を表す形態標識もない。したがって、スペイン語では何をもって主題と見なすか、主題と主語はどのように関連するかという問題が生じる。野田 (1994a) によれば、スペイン語では一般に主題と主語が重なって出現することが多いとされる。しかし、主語と主題を切り離して考える立場もあり、これは主題をどう規定するかにかかっている。小論では日本語とスペイン語を対比して両言語の主題をどう捉えるか、そして主題と主語はどのような関係にあるかという問題を考察する。

2. 主題の概念

主題という概念は論者によってかなり相違があるが、この概念の基礎となるのは、文は主題 (theme) と説明 (rheme) という情報機能の異なる部分から成り立つという考え方である。主題と説明との関係、つまり題説関係は文の情報構造にかかわる。これに対し、主語と動詞 (または述語) との関係、つまり主述関係 (predication) は文の統語構造にかかわる。題説関係の研究はプラグ学派の機能的文構成 (または現実分析) の理論から発展したが、それを促したのは主述関係にもまして題説関係が語順に反映する傾向が強いチェコ語の特質から来たものであろう。この分野の先駆者である Mathesius (1981: 93) は文を「陳述の基礎」(述べられるもの) と「陳述の核」(何かを述べる部分) に二分し、通常の文は「基礎—核」の語順 (客観的配列) をとるとした。同じ学派の Firbas は基礎と核に代わってテーマ (theme)

* 小論は東京外国語大学国際日本研究センター「外国語と日本語の対照言語学的研究」第6回研究会 (2012年3月3日) で「日本語とスペイン語の語順と主題」と題して口頭発表した草稿の一部を全面的に改訂・加筆したものである。

とレーマ (rheme) という用語を導入した。テーマとは「既知のものあるいは言語が場面の上下の文脈から推論されるもの（または単に明らかな会話の出発点となっているもの）を担う文の要素」で、伝達の基礎であり、レーマは「新情報をになう文の要素」で、伝達の核であるとされる (Firbas, 1987: 27)。テーマとレーマの境界には「移行 (transition)」がある。これは広い意味ではレーマの一部で、それを構成するのは助動詞や動詞である。Firbas の理論では語順よりも伝達力 (communicative dynamism, CD) という概念が重視された。コンテキスト依存的な要素は CD が低く、コンテキスト独立的な要素は CD が高い。テーマは文中で最低の CD を担う要素である (ibid.: 64)。語順よりも文成分の伝達力の差異、つまり既知の情報か新情報かということがテーマとレーマを分ける基準となる¹。

以下では主題（テーマ）、説明（レーマ）という用語を使用するが、Firbas の概念を引き継ぐわけではない。しかし、主題らしさには程度の差があることを認める。「主題」は文による情報伝達の出発点となる素材を述べる部分であり「説明」は主題について説明する部分である。つまり、題説関係とは何かについてその属性や出来事を説明するという意味の関係である。したがって、主題には名詞的成分が当てられると考える。典型的な文はまず主題が提示され、次に説明が付け加えられるという二肢的構成をとる。通常の配列では主題が先行し、説明が後続する。しかし、主題がなく、説明だけから成るもの、逆に主題だけから成るものなど単肢構成の文もある。Firbas (ibid.) は主題と説明の間に「移行」を設定した。これはチェコ語にせよ、英語にせよ、基本的に SVO 語順なので、主題と説明の境界に動詞が介在するという考え方である。日本語のような SOV 型の言語では動詞が境界とならないが、主題と説明の間には何らかの境界、切れ目があると考えられる。日本語の場合、主題を提示するとされる助詞「は」が切れ目を表示する手段であると考えられることができる。このように、主題には、(a) 意味的要件—何かについて属性や状況を説明するという意味的な題説関係を構成していること、(b) 分離的要件—主題と説明の間には「切れ目」があること、この二つの要件が必要であるであると想定する²。主題と説明との間の切れ目は統語的特徴、形態標識または潜在的休止などによって示されると考える。

野田 (1996: 293) は、言語で主題を表す手段としては語順（主題を前に置く）、音声（主題を区切る休止を置く）、形態（主題を表すマーカーを付ける）の3つがあり、日本語は3つとも使うとし、日本語の「は」のような形態的手段を持つ言語を主題明示型、英語やスペイン語のようにそれを持たない言語を主題暗示型と呼んだ。ここで問題なのは日本語の「は」で示されるような明示的な主題とスペイン語のようないわゆる主題暗示型言語における主題を同様に扱って良いかどうかということである。スペイン語にも形態的手段として *en cuanto a* 「…に関しては」のような主題導入表現が存在するが、「は」のような主題標識とは機能が異なり、使用頻度も低い。スペイン語では統語的手段と音韻的手段が主題を示す上で重要となる。しかし、語順の上で文頭に位置する形式をすべて主題と見なすことはできないし³、休

1 CD 量の差異は数値で示されるが、その判定基準には恣意的なところがあるように思われる。

2 切れ目とは、尾上 (2004: 26) が断裂あるいは落差と呼ぶものに対応するが、同書のように意味的なものではない。

3 Halliday (1994: 37-38) は、日本語の「は」のような主題表示の形式をもたない英語などの言語では、文頭の位置が重要で、そこに置かれた要素はすべて主題 (theme) であると主張するが、ここで取り上げる主題の概念とは一致しない。

止についても同じである。また、スペイン語は英語ほど卓立などの音韻的手段を情報機能のために利用しない。主題を認定する決定的な基準を立てにくいのがスペイン語の主題の問題であり、議論が分かれる原因でもある。このため、従来の日西対照研究では、明示的な形態標識をもつ日本語の主題を手がかりにスペイン語の主題を考察するのが1つの有力な手段となってきた。小論でも、まず日本語の主題について確認した上でスペイン語の主題の問題を考え直すことにしたい。しかし、主題の概念を厳密に定義した上で演繹的に議論するのではなく、言語の形式に則して考察を進めたいと思う。

3. 日本語の主題

3. 1. 主題の表示手段

日本語には主題の表示手段として次の3種類があると考えられる。助詞「は」、提題表現および無助詞である。この他に、ガ格を持つ文の名詞的述語が主題とされることがある。例えば、(1)のような名詞文（名詞述語を持つ文）では述語名詞「責任者」が主題であるとされる。

(1)私が責任者です。

(2)責任者は私です。

この型の「が」を持つ文は、「は」主題を持つ有題文(2)と等しい意味を持つとされ、三上 (1972: 104) は陰題の文と呼んだ。この考え方は広く受け入れられており、例えば記述文法研 (2009: 178) は(2)型は明示的な主題を持つ文であるのに対し、(1)型は暗示的な主題を持つ文としている。しかし、この暗示的主题は意味的なものであり、前提と言うべきであろう。主題という用語は文法的手段によって表示されているものに限りたい。

A. 「は」による主題

提題助詞とも呼ばれる主題標識の「は」を名詞的成分に付ける。「は」は主題を明示する形態標識であり、前記の意味的要件と分離的要件を満たす典型的な主題を表示することができる。「は」は文のその他の部分から主題を分離させて、説明と対峙させると考えられるからである。これに対して、格助詞「が」はそれの付く格成分（主格成分、すなわち主語）を述語に密接に結合させ、主述関係を構成する。例えば、次の文のうち、

(3)太郎が花子を招待した。

(4)太郎は花子を招待した。

(5)花子は太郎が招待した。

(3)は主題がなく、文全体が説明であり、ガ成分（主格）すなわち主語がヲ成分（対格）とともに動詞を主要部とする主述関係を構成している。この文は事象全体を描写する中立叙述の場合と「が」の排他的用法によって主格に焦点が置かれる場合に用いられる。これに対し、(4)は主格が取り出されて主題となったもの、(5)は対格が同様に主題となったものである。小論では生成文法的な変形は想定しないが、便宜的に(4)や(5)は主格や対格が主題化した文であるという表現を用いることにする。ただし、「は」が主題化するのは格成分だけではなく、連体修飾語に付くとされる場合「象は鼻が長い」から論理的な説明が難しい破格とされる場合「このにおいてはガスが漏れてるよ」まで非常に多様である (v. 野田, 1996)。

「は」は対比の意味も表すが、そういう場合を除いたとしても、主題を表すとされる「は」の用法がすべて意味的要件を満たしているかどうかは議論の余地がある。主題性の高い場合と低い場合があると推定される。しかし、本題から外れるので、これ以上は論じないでおく。

B. 提題表現による主題

「とは、って、については、なんか、ったら、なら、たとえば」などの表現を名詞的成分に付ける。これらは単一の助詞ではないので、提題表現と呼ぶことにする。提題表現は格成分を主題とするというよりむしろ主述構造の外から主題を導入する機能を持つ。これも意味要件と分離要件を満たす典型的な主題を表示することができると考えられる。

C. 無助詞による主題

名詞的成分に何も助詞が付かない場合である。助詞 \emptyset を付けると言い換えることもできる。話し言葉でインフォーマルな文体に多いとされ、かつては助詞の省略と見なされるのが普通であったが、現在では独自の情報機能を持つという主張も多い。名詞的成分が無助詞であることに加え、それが通常は文頭に位置するという特徴がある。

野田 (1996: § 27) は無助詞構文を主題性の無助詞(6)と非主題性の無助詞(7)に分ける。主題性は「は」、非主題性は「が」が復元できる場合に該当する。

(6)三上君、どうしてる？

(7)お腹、痛い。

丹羽 (2006: 289) も主題性のものを無助詞題目、非主題性のものを無助詞格と呼び、区別するが、両者は連続的であり、いつも明確に区別できるわけではないと述べている。さらに、無助詞が「は」または「が」のどちらの代用とも言えない場合がある。尾上 (2004: 21) は、次のような文は「は」も「が」も使いにくい場合であり、無助詞には独自の使用領域があるとしている。

(8)あ、あの時計止まってる。

(9)十円玉ある？

無助詞はくだけた文体の話し言葉で起きやすいとされるが、改まった使用域でも意図的に無助詞が選択されることがある。例えば、次のような場合である。

(10)わたし、手伝います。

(11)日本酒、あります。[ラーメン店の掲示] (加藤、2001: 102)

(10)は「だれか手伝ってくれませんか」の答えとなるような文脈で用いられるが、無助詞となるのは「は」から生じる対比的な意味「(他の人は知らないが) わたしは手伝います」および「が」から生じる排他的な意味「(他の人ではなく) わたしが手伝います」を避けるためである。(11)の場合も「日本酒はあります」とすると対比の意味が生じ、「日本酒があります」とすると排他の意味の他に存在を表す中立叙述の意味ともとれる (v. 加藤、ibid.)。

こうしたことから無助詞に独自の機能を認める見解が生じる。加藤 (1997: 79) によると、ゼロ助詞の機能は脱焦点化である。丹羽 (2006: 299) は、無助詞題目は「新たに題目を立てる場合に現れやすく」、「は」は「新題目には用いられにくい」と述べている。黒崎 (2006: 78) は、「話し言葉における無助詞の役割は新規話題の導入であり、この新規話題は聞き手の予測や期待に関係しない点が「ハ」とは異なっている」と述べている。また、菊池 (2006) は主題の「は」が「主語表示マーカー」であるのに対し、主題性の無助詞は「その場 (対話

の場)の関心固定ツール」であると主張している。

結局、無助詞には主題性の場合、非主題性の場合およびどちらとも分けにくい場合があることになる。無助詞は「は」でも「が」でもない独自の使用領域を持つ統語的手段と考えるべきであろう。無助詞成分は主題の意味的要件は満たしており、その後には潜在的休止があつて、分離的要件もある程度満たしていると言えるが、「は」のような明示的標識が欠如しているということであり、主題提示の表現手段としては不完全なものである。しかし、無助詞成分は主題性の高い場合もあり、その場合は主題と認めるべきである。この主題性の高さとは、その名詞的成分の情報的な条件と関係すると見られる。そこで、この問題を次ぎに取り上げる。

3.2. 主題となるための必要条件

主題となるのは名詞的成分であると規定したが、それが主題となるためにはどのような条件が必要であろうか。久野 (1973: § 25) は旧・新情報の対立を原理として「は」と「が」の用法を説明した。それによると、「が」は「新しいインフォメーション」を表す標識である。しかし、「は」が「古いインフォメーション」を表すというわけではない。「は」は主題を表すが、主題となるのは総称 (generic) 名詞句か、すでに話題に上っている事物を指す文脈指示 (anaphoric) 名詞句でなければならないとされる。野田 (1996b: 109) は「が」と「は」の使い分けに「新情報と旧情報の原理」が働くとしているが、それは使い分けに働くことされる5つの原理の1つにすぎない。

益岡・田窪 (1992) は、主題になるための必要条件として「取り上げられる名詞が、話の流れ、発話場面の状況、常識等から、どの対象を指し示しているかが特定できるものでなければならない」とし、「指している対象が特定できない (不特定の) ものは主題とすることができない」と述べている (ibid.: 145-146)。同書で「特定できる」としているものは、丹羽 (2006: 163-164) の言う「同定可能なもの」と重なると思われる。題目 (主題) となる名詞句は「同定可能な名詞句でなければならない」とされ、これは同定制約と呼ばれる。また、同定可能な名詞句を定名詞句と呼ぶ。定名詞句とは「聞き手にとって指示する対象の範囲が定まっていると話し手が考える名詞句」であり、そうではない不定名詞句と対立する。

丹羽 (ibid.) の定・不定という区別は有効な基準であると思われるが⁴、用語として不都合な面もある。名詞句の定・不定は、日本語のように冠詞のない言語では発話場面や文脈によって判断するしかないが、スペイン語のように冠詞を持つ言語では形態的に示される。ところが、形式上の定・不定とここで扱う意味上の定・不定は必ずしも一致しないと見られるからである。そこで、意味上の定・不定を表すため、誤解を招きかねない用語ではあるが、「既知 (given)」と「未知 (not given)」を用いることにする。既知とは、その名詞句の指示対象が聞き手にとって同定可能であると話し手が推測しているものであり、そうでないものは未知である。既知には次のような場合が含まれる。

- (a) 先行文脈ですでに言及されたもの。
- (b) 発話場面に関与する直示的なもの。

4 ただし、その定・不定の定義を全面的に受け入れるわけではない。

(c) 話し手と聞き手に共通して関心があるはずのもの。

(d) 特定の個体ではなく、ある集合をさす総称的なもの。

名詞句が既知であることは主題のもう1つの要件と考えられるので、情報的要件と呼ぶことにする。しかし、既知名詞句は主題になりやすいとはいえ、もちろんそれだけで主題選択が決定されるわけではない。既知名詞句がガ格主語となることもあるからである。つまり、既知項目は主題となる場合もならない場合もある。これに対し、未知項目は原則として主題となれない。

これまで取り上げた主題の3要件から見ると、「は」主題は前記の3要件を満たす典型的な主題を構成するのが普通である。しかし、次のような疑問文の名詞句は未知項目であって、主題性が低い。

(12) 近くに郵便局はありますか。

無助詞名詞句は既知の場合と未知の場合がある。既知名詞句の場合、例えば前記の(6)、(8)、(10)の無助詞成分は主題性が高い。これらの名詞句は主題と見なして良いと考える。

4. スペイン語の主題に関する諸説

スペイン語で何を主題と見るかについては、議論が分かれる。考察を進める前にこれまでどのような主張が行われたか、比較的最近の内外4つの文献を取り上げ、確認しておきたいと思う。はじめの二つは日西対照研究である。

4.1. 野田 (1994a)

野田氏の一連の論考 (1983, 1994a, 1994b) は、主題に関する日西対照研究の先駆的なものである。スペイン語の基底語順は VOS であると想定し、動詞を越えて文頭に移動した格成分および節を主題と見なす。ただし、格成分は定名詞でなければならない。したがって、動詞前にある定名詞の主語は主題であるが、動詞後にある定名詞の主語および位置にかかわらず不定名詞の主語は主題ではないとされる。主題と見なされる主語には主格主語(1)と与格主語(2)の場合があるとされる (野田、1994a) ⁵。

(1) *Pedro comió la tortilla.* ペドロはオムレツを食べた。

(2) *A mí me gusta la música clásica.* 私はクラシック音楽が好きだ。

左方転移 (left dislocation) の与格・対格目的語も主題と見なす。次は対格目的語の例である。

(3) *La tortilla la comió Pedro.* オムレツはペドロが食べた。

左方転移文には転移された目的語と同一指示の接語代名詞が現れる。「代名詞重複」と言われる現象である。目的語が不定名詞句の場合は代名詞重複が起きないが、この「話題化 (topicalization)」と呼ばれる構文の前置された目的語は主題ではないとされる。

(4) *Seis hijos tuve, los seis murieron.* 子どもが6人いたが、6人とも死んでしまった。

同論文の指摘するとおり、このような文頭の不定名詞句は主題ではなく、直接補語が動詞前

5 主題は、引用者が斜体とした。

に移動して有標の焦点となったものと考えられる。

野田 (ibid.) はまた、主題化を行うための構文として疑似分裂文(5)と分裂文(6)を挙げる。

(5) *La que está llorando es María.* 泣いているのはマリアだ。

(6) *Es María la que está llorando.* マリアが泣いているのだ。

4.2. 福嶋 (2004)

スペイン語の主題にアプローチするためには日本語の主題を手がかりにするしかないとして、日本語訳をしたとき、主題の「は」が必要になるような句をスペイン語の主題と見なすという観点をとる。スペイン語で主題の表現手段としては、休止、コンマ、抑揚(卓立)、「～については」を表す語句、定冠詞を付けた名詞句、文頭の位置があるとする。また、文頭で主題となる成分としては、直接補語・間接補語(左方転位文)、主語、前置詞句、副詞(場所の前置詞句、*históricamente* など)、動詞(不定詞)、所有格の語(所有形容詞+名詞)、疑似分裂文の主語、条件節、接続法を用いた節(*que* + 接続法)があるとする。

福嶋(2004)は日本語の「は」成分に相当するものをスペイン語の主題と見なし、対照するのが目的であり、スペイン語独自の原理を追求することはしていない。福嶋(2003)では野田(1994a)を高く評価しながら、いくつか疑義を示している。その主要なものは、動詞前の定名詞主語を一律に主題と見なすという点である。例えば、(7)に対する答えとしては(8a, b)のどちらの文も可能であるから、動詞前の定名詞が常に主題とは限らないと言う(ibid.: 52)。

(7) *¿Qué ocurrió?* 何が起こったのですか。

(8) a. *Pedro llamó.* ペドロは / が電話しました。

b. *Llamó Pedro.* ペドロが電話しました。

この批判は、主題を旧・新情報の対立から見る観点に立ったものと思われるが、野田(1984, 1996)は、日本語の「は」と「が」の選択が旧・新情報の原理のみによるとはしておらず、スペイン語の主題についても同じ原理を論拠にしているわけではないので、有効な反証とはならないだろう。

4.3. Zubizarreta (1999)

Zubizarreta(1999)は、主題(*tema*)と解説(*comentario*)という用語を用い、主題は文が取り扱うこと、解説は主題について述べられることであると規定する。スペイン語では、主題は文の左の周辺部に位置するとされる。主題として扱われるのは名詞句・前置詞句だけで、それは情報の既知・未知という区別にはかわりないが、特定の(*específico*)でなければならない。スペイン語で主題として文法化されているのは2つの場合だけ、すなわち「張り出し主題(*hanging topic, tema vinculante*)」と「左方転移(*dislocación a la izquierda*)」を認める。張り出し主題は談話主題を転換する機能があり、主節の左端に現れる。主題と文内のある要素は同一指示の関係にあるが、文法的依存関係はない。文中の要素は代名詞(9)でも名詞(10)でも良く、主題導入表現がない場合(11)も含まれる⁶。

6 例文の和訳は引用者が付した。次節で取り上げる文献も同じ。

(9) *En cuanto al hermano*, parece que los padres *lo* contemplan mucho. 兄については、両親がとても大事にしているようだ。

(10) *En cuanto al hermano*, parece que *el desgraciado* se lleva bien con todo el mundo, inclusive con los padres. 兄については、あの不幸な男は両親を含め、だれともうまくやっているようだ。

(11) *Bernardo*, sin embargo, estoy seguro de que nadie confía en *ese idiota*. しかしながら、ベルナルドは、だれもあの馬鹿のことは信用していないのは確かだ。

一方、左方転移は主題が主節または従属節の左端に現れるが、主題と文中のある要素が文法的依存関係にあることが重要な特徴であるとされる。それが直接目的語(12)か間接目的語(13)であれば接語代名詞の存在、つまり代名詞重複が不可欠となる。

(12) *A sus amigos*, María *los* invitó a cenar. 友だちをマリアは夕食に招待した。

(13) Estoy segura de que *a María*, Pedro *le* habla por teléfono todos los días. マリアにはペドロが毎日電話していることは確かだ。

しかし、それが主語(14)や不定名詞句(15)の場合は何の形式も現れない。

(14) Parece que, *los González*, todo el mundo piensa que tienen mucho dinero. ゴンサーレス一家のことは、大変金持ちだと皆思っているようだ

(15) Estoy segura de que *manzanas*, Pedro come todos los días. リンゴをペドロが毎日食べていることは確かだ。

Zubizarreta (ibid.) が左方転移に含めている(14)~(15)の文は代名詞重複がないため、普通は左方転移に含めない構文である。(14)は従属節の主語の主題化ということになるが、同書はこのように休止で区切られ、文から遊離している場合に限って主語の主題化を認めている。管見では、(15)は直接補語の不定名詞句が動詞に対し前置されたもので主題ではなく、直接補語の焦点化と見なすべきである。

以上のとおり、Zubizarreta は文の他の部分から遊離して文頭に置かれた成分を主題と見なす。従属節から遊離して節の外に移動した(14)のような主語は主題とされるが、通常の文頭にある主語は主題とは考えない。

4.4. アカデミア文法 (RAE, 2009)

スペインと中南米諸国の学士院が協力して編纂したアカデミア文法は、テーマ (*tema*) とトピック (*tópico*) とを区別する。テーマまたはテーマ的信息 (*información temática*) とはそれについて何かが述べられる素材であり、提示される新情報が支えられる基礎となるものである⁷。一方、トピックはテーマ的信息を担う点は同じであるが、文の中から突出し、引き離された分節 (*segmentos temáticos destacados o desgajados*) を指す (ibid.: II, § 40.1-40.2)。具体的には、*en cuanto a* 「に関して」のような導入表現や休止で区切られることによって文の周辺部に置かれた成分を指す。テーマに対応するのは説明 (*rema*) または説明的信息 (*información remática*) であるが、これは焦点とは区別される (RAE, 2009, II: § 40.2c)。焦点はメッ

7 例えば、次の文で文頭の副詞句は「テーマ的信息」であるが、「トピック」ではない。

En 1945 terminó la Segunda Guerra Mundial. (op. cit.: § 40.1d) 1945年に第2次大戦が終わった。
筆者も文頭にある時や場所の付加語は主題と考えない。寺崎 (1987) では、これを場面設定要素と呼んだ。

ページの中で際立つ分節で、説明的情報全体に該当する場合もあれば、その中心部分に該当する場合もある。焦点には提示焦点 (*foco presentativo*) と対比焦点 (*foco contrastivo*) があるとされる (ibid.: § 40.4b)。

トピックは内的構造、統語的位置および対応する文との結び付きという3基準で分析可能とされる。トピックの内的構造、つまりどういう統語範疇がトピックを構成するかについては、名詞句、代名詞句、前置詞句、副詞句 (観点を表すもの)、形容詞句、不定詞、現在分詞、名詞節などが挙げられている (ibid.: § 40.2d-e)。また、トピックを導入する表現としては、*a propósito de, en cuanto a, en lo relativo a, en lo que respecto a, en relación con, hablando de, respecto de* などがある (ibid.: § 40.2f)。

トピックの統語的位置は、文頭、文末、文中のいずれも可能であるが、文頭がもっと多く、文中(16)も普通であるが、文末(17)はまれであるとしている (ibid.: § 40.2k)。

(16) *Las mujeres, administrativamente hablando, [...] son mejores que los hombres.* 女性は、管理上で言えば、男性よりも良い。

(17) *No la había oído jamás, esta canción.* この歌は、彼は全然聞いたことがなかった。

トピックとそれに対応する文との結びつきに関しては、文頭のトピックはその後の文中で接語代名詞によって結び付けられる (代名詞重複) のが普通である (転位構文と呼ばれる) が、これは直接補語と間接補語の場合に限られる。次は直接補語の例である (ibid.: § 40.3a)。

(18) *Eso yo lo sabía.* それは、私は知らなかった。

属詞の場合は無強勢代名詞が現れる場合と現れない場合(19)があるとしている (ibid.: § 40.3d)。

(19) *Muy inteligentes, no parecía que {lo fueran ~ fueran}.* そうは見えなかったが、彼らは非常に頭が良いのだ。

以上のようにアカデミア文法で言うトピックはかなり適用範囲が広く、名詞的成分だけでなく、副詞や形容詞など非常に多様な統語範疇に属する成分が含まれる。トピックの重要な特徴は、それが文から引き離され、遊離した要素であるという点であり、つまり分離的要件が重視される。これは Zubizarreta (1999) と共通するが、テーマが文頭だけでなく、文中や文末にも位置するとしている点に相違がある。このように文からの分離という形式的要件を重視し、小論で取り上げたような他の要件は無視されるため、トピックという概念の内実は拡散して不明瞭になっていると思われる。後述する小論の立場からすると、前記の(16)、(17)、(19)は主題ではない。

野田 (1994a) の主題と著しく異なるのは、動詞前の主語はトピックではないとしていることである (ibid.: § 40.31)。例えば、フランス語 "Moi, je pense que..." と異なり、スペイン語でこれに対応する "Yo, yo pienso que..." は存在しないとする。しかし、フランス語の例と対比すべきなのは "Yo pienso que..." 「私は...と考える」であり、フランス語 "Je pense que..." にスペイン語 "Pienso que..." が対応すると考えるべきであろう⁸。ただし、アカデミア文法でも主語をトピックと認めている場合がある。例えば、特に会話に現れる多重トピックの場合には、主語をトピック (の一つ) と見なしている (ibid.: § 40.21)。

8 スペイン語はいわゆる「代名詞主語省略 (pro-drop) 言語」なので、対比・強調の場合を除いて主格代名詞は表示されない。

(20) *Yo, hoy, de ese asunto no pienso hablar.* 私は、今日はその件については話すつもりがない。

(21) *Mi abuela el arroz lo hacía siempre muy caldoso.* 祖母は、米をいつも水気を多くして調理していた。

これらの場合、主語の後に他の成分が入って動詞から分離していることがトピックと見なす理由なのだろう。これらの例は、管見でも当然に主題である。

5. スペイン語の主題再考

主題に関する日西対照研究において野田（1994a）は古典的とも言える論考なので、これを参照しながら、スペイン語の主題およびトピックについて考え直したいと思う。

5.1. 主題となる成分

野田（1994a, 1996: 296）は、スペイン語で主題化できるのは格成分か、述語を中心とする節だけであるとしている。つまり、統語範疇としては名詞的成分だけである。これに対し、福嶋（2004）やアカデミア（RAE, 2010）の主題はもっと適用範囲が広い。後者のトピックには副詞句、形容詞句、現在分詞なども含まれる。小論では前記のように野田と同様、主題は名詞的成分（名詞句、名詞節など）のみに限定する。

野田（1994a, 1994b）の主張によると、主題となるのは定名詞句であり、不定名詞句は主題になれない。定名詞句は前述の既知に該当するので、問題がない。不定名詞句については後で検討する。

統語機能の観点から見ると、日本語の「は」は、前述のとおり、格成分に付く場合とそれ以外の成分に付く場合があり、説明部分との関係は非常に多様である。一方、スペイン語は、野田（1994a）によると、左方転移および主題化による場合、格成分しか主題にできないとされる。これにも異存がない。ただし、下記の提題表現の場合は、主題と説明との関係が多様である。

5.2. 主題の表示手段

スペイン語には3種類の主題を表示する手段があると考えられる。提題表現、左方転移および主語の動詞前配置である。

A. 提題表現

主題を導入する形態的手段として一連の提題表現がある。代表的なものは *en cuanto a* 「に関して」、*en relación con* 「に関して」、*hablando de* 「について言う」と、*respecto de* 「に関して」などである。これらの提題表現は日本語の提題表現と同様、典型的な主題を表示することができると考えられる。次は、使用頻度が高とも高いと見られる *en cuanto a* の例である⁹。

(1) *En cuanto a tu propuesta, (te comunico que) la estudiaremos mañana.* (Salamanca: 441) 君

9 以下の例文では、出典表記の後の訳文は筆者によるもの。出典表記のないものは例文・訳文とも筆者によるものである。訳文の後に「出典表記があるものは訳文も含めて原典からの引用である。」

の提案については明日検討することになる（とお知らせする）。

(2) *En cuanto a que saldría más caro el viaje en tren, estás muy equivocado.* (ibid.) 鉄道旅行はより高つくつというのは、君は非常に間違っている。

この種の主題は(1)のように後の説明にある格成分と対応する(照応形 *la* で示されている)場合もあるが、(2)のように主題と説明との間に何らかの意味的つながりがありさえすれば十分である¹⁰。

B. 直接補語および間接補語の左方転移

定名詞句の直接補語または間接補語が主題化すると、いわゆる左方転移 (left dislocation) の構文となる。(3)~(4)は直接補語、(5)は間接補語が主題化している。

(3) *El pasaporte lo mostré al policía.* パスポートは警官に見せた。

(4) *A María la invitó Juan.* マリアはフアンが招待した。

(5) *Al policía le mostré el pasaporte.* 警官にはパスポートを見せた。

感情動詞などのグループは通常は主題を持たない後置主語構文をとるが、場合によって間接補語または直接補語が主題となる¹¹。

(5) *A Carlos le gusta mucho el fútbol.* カルロスにはサッカーが大好きだ。

(6) *¿A usted le molesta la lluvia?* あなたは雨がいやなんですか。

この型の構文では、主題化された定名詞句の補語が動詞前(通常は文頭)に配置され、必ず同一指示の接語代名詞(与格・対格)による代名詞重複を伴う。

これらの文は、文頭の主題がなくても文法的には成立する。このように前置された補語は主述関係の外に置かれ、語順および代名詞重複という形態的手段によっても明示されているので、分離的要件を満たしており、完全な主題の資格を備えていると言えるだろう。

C. 主語の動詞前配置

野田(1994a)によると、定名詞句の主語が文頭、より正確には動詞前に配置されたものは主題である。次のような文の主語は主題でもあることになる。

(7) *El avión llega a las ocho de la mañana.* 飛行機は午前8時に着く。

(8) *El responsable soy yo.* 責任者は私だ。

このような主語を動詞前主題と呼ぶことにする。これを真に主題と見なして良いかどうかは次節以下で検討したい。

5.3. 主題と主語

前述のとおり Zubizarreta (1999) は、ここで取り上げる動詞前の主語を主題とは認めないし、アカデミア (RAE, 2010) も「テーマ的情報」であるとは認めるが、トピックとは認めない。Zubizarreta やアカデミアが主題またはトピックの要件として重視するのは「張り出し (hanging)」あるいは「引き離し (*desgajado*)」という分離的要件である。つまり、主題と文の他の部分の間に「切れ目」があるということである。この切れ目は音韻的なものと理解さ

10 これらの提題表現は、文頭の位置にない場合、主題性が下がってしまう。例えば、次のような場合は、属詞 *optimista* の補足成分と考えるべきだろう。

Soy optimista en cuanto a España. 私はスペインに関しては楽観的だ。

11 野田 (ibid.) は、このような動詞グループの補語を与格主語として扱うが、小論では与格主語という概念は認めない。

れる。アカデミア文法について言えば、文頭のトピックの場合は、その後に休止が入るということである。しかし、「引き離し」は同時に統語的な特徴であるとも考えられる。トピックの実例を見ると、それは主述関係の外に遊離している成分であると言えるからである。

一方、動詞前主語の場合も述語との間にも切れ目があると考えられることができる。音韻的には、スペイン語の比較的速度の遅い発話では主語名詞句とその後の動詞との間に休止が入ることはよくあることである。これに対し、動詞と後続する補語の関係は統語的に密接であり、その間には潜在的休止もない。主語が動詞に後続する場合も同じである。したがって、アカデミア (ibid.) の言う文頭のトピックと動詞前主題は、音韻面で切れ目があるという点についてはあまり変わりがないと見る事ができる。統語面については、Alarcos (1994) のように定形動詞では文法的主語が人称語尾で表示されていると考えるなら、語彙的主語は主述関係の枠外に引き離されて存在すると見ることも可能である¹²。その見方に従えば、動詞前の主語は意味的要件と分離的要件を満たしていることになり、主題の資格を持っていると言えるだろう。

5.4. 主題と語順

左方転移も動詞前配置も、それにより表示される主題は動詞前の位置に出現する。スペイン語では主題となる定名詞句が動詞前の位置に配置されることが必要条件である。日本語の「は」のように明示的な形態標識がないので、語順が主題提示の手段として重要となるわけである。主題と説明の配列原則からすれば、動詞前の位置は主題を表示するのにふさわしいものである。野田 (1994a: 51) によると、主題化とは主題に指定された成分のコピーを命題前に付加し、その後元の成分は、主語の場合はゼロ代用化 (削除) され、直接目的語・間接目的語の場合は接語代名詞化される操作であると言う。小論では生成文法的な変形という概念を認めないので、移動や削除などの操作を仮定しないが、比喩的な意味なら基底語順に置かれた格成分が主題化するという言い方をして差し支えないと思う。野田 (1983, 1994a) は、日本語の基底語順が SOV であるのに対しスペイン語は VOS であると仮定する。この仮定は、両言語の統語構造が完全な鏡像関係となるので、理論的には美しく見える。しかし、基底語順あるいは基本語順は現実のデータに即して考えるべきだとする立場からすると、スペイン語の基底語順は VOS ではなく、VSO である。基底語順が現実に具現化するのには、主題化が起きることのない非定形動詞構文であると考えられる。非定形動詞が主語を持つ場合は、必ず動詞の直後でなければならない。その常用語順は VSO である¹³。しかし、基底語順がいずれであるにせよ、定形動詞構文では、一部の動詞グループを除き、主語は動詞前に配置さ

12 Alarcos (1994: § 13) は動詞人称語尾を主語に呼応する標識ではなく、真の主語であると見なし、文法的主語と呼ぶ。それを特定するために付け加えられた名詞は語彙的主語または明示的主語と呼ばれる。つまり、人称語尾を単なる呼応の形態とは考えない。

13 例えば、次の (i) は辞書の語義記述で不定詞構文、(ii) は現在分詞構文で、いずれも独自の主語を持つ例であるが、VSO の語順となっている。非定形動詞の主語は斜体で示す。

(i) entregar: dar *una persona* una cosa a otra persona. (Salamanca, 1996) 引き渡す：ある人があるものを別の人に与えること。

(ii) El asunto se solucionaría presentando *usted* su candidatura. (RAE, 2010: §27.4.2a) その件は、あなたが立候補すれば解決するだろう。

れるのが原則である。つまり、多くの場合、主語が主題化して文頭に配置され、SVOの語順をとるわけである。

スペイン語は語順の自由度が比較的高い言語であるが、他動詞文では主語が動詞前に置かれることが圧倒的に多い。しかも、主語は定名詞句であることが圧倒的である。そうすると、主語は大抵の場合、主題であるということになり、ことさら主語とは別に主題を設定する必要は薄れてしまうようにも見える。それが主題という概念を文の特殊な遊離成分だけに限定する考え方の根底にあるのかもしれない。しかし、主語とは別に主題を設定することが無意味なわけではない。スペイン語では主語と主題が乖離する場合もかなり多いからである。例えば、次の文では(9)がもっとも普通の語順を持つ文型であるが、(10)がそれに継ぐ¹⁴。

(9) *Juan compró un coche.* フアンは車を買った。

(10) *Un coche compró Juan.* 車をファンが買った。

(10)は直接補語がいわゆる「話題化」した文であるが、これは主題ではなく前述のとおり不定名詞句の直接補語が焦点化した場合に相当する。スペイン語ではこの他に主語が主題化していない次のような文型も可能である。

(11) *Compró Juan un coche.* ファンが車を買った。

(12) *Compró un coche Juan.* 車をファンが買った。

これらの文は常用文型から外れるため、平叙文としてはやや落ち着きの悪い感じを伴うようで、出現頻度は低いが、音調(intonation)を変えて疑問文とすれば常用される文型である。

(13) *¿Compró Juan un coche?* ファンが車を買ったんですか。

(14) *¿Compró un coche Juan?* 車をファンが買ったんですか。

しかし、疑問文でも動詞前主題を持つ文は頻繁に使用される。

(15) *¿Juan compró un coche?* ファンは車を買ったんですか。

自動詞文は動詞前主題を持たない文が多い。特に、生起、出現、存在などを表す自動詞グループでは(16)型の無題文が普通であり¹⁵、(17)型は主語が主題に取り出された有題文である¹⁶。

(16) *Llega el autobús.* バスが着いた。

(17) *El autobús llega.* バスは／が着いた。

ところで、他動詞文の場合、主語は主題でなくても動詞前に配置されるのがむしろ普通である。次の例は主題になれない不定名詞句が主語の場合である。

(18) *Ninguno hizo ademán de defenderse, ...* (寺崎、1987) だれも身を守ろうとするそぶりをしなかった…

(19) *Una estrecha hendidura señala la entrada de una gruta, ...* (ibid.) 狭い割れ目が洞窟の入り口を示しており、…

野田(1994: 93)によると、述語が終了・変化、状態、動作を表す場合は、主格名詞の存在が前提になるので、主語を述語の後に置くことが難しいと言う。つまり、不定名詞句の場合は主題化とは別の意味的な理由により移動が起きることになる。しかし、この不定名詞句主

14 スペイン語他動詞文の語順についてデータを分析した出口(1984)によると、SOVの出現頻度は71%、OVSが22%で、合わせて93%を占める。

15 寺崎(1998: 121)は、この種類の構文を提示動詞文と呼んだ。

16 ただし、まれには主語に有標の焦点が置かれた場合もあり得る。

語について述べられていることは定名詞句主語にも当てはまるはずであり、両者を分けて扱う必然性は乏しい。他動詞文の場合は、意味的要因というより統語的要因により主語の動詞前配置が起きると考える方が良いのではないだろうか。他動詞文では前記の例(9)にも見られるように定名詞句の主語が主題、不定または定の直接補語が説明というのが典型的な文型である。この典型的な文型に準拠して主語が不定名詞句であっても、前置が起きると考えられる。スペイン語では主語と直接補語が代名詞化されている場合および直接補語が特定の間人である場合（前置詞 *a* が付く）を除いて主語にも直接補語にも形態標識がないので、動詞を挟んで主語と直接補語が対峙する語順（SVO）が聞き手にとっても理解しやすく、安定した構造となるからである。

このように、定名詞句も不定名詞句も主題の位置に立ち得るということは動詞前の位置が主題の表示手段としては不完全であることを意味する。この点では、日本語の無助詞と類似性のある表示手段であると言える。

5.6. 主題と定・不定

英語の場合と同様、スペイン語の名詞句の定/不定の対立は日本語の「は」/「が」の対立と一致することもあるが、いつも一致するわけではない¹⁷。スペイン語で動詞前主題と見なされる定名詞句が必ずしも日本語の「は」主題に対応するわけではないということである。次の文はどちらも動詞前主題が「が」で訳されている。

(20) *Don Manuel y doña Ana me invitaron a comer.* マヌエルさんとアナさんが私を食事に招待してくれました。(上田, 2011: 84)

(21) *El Barcelona ganó al Bilbao.* バルセロナ [サッカーチーム] がビルバオに勝ちました。(ibid.: 85)

しかし、どちらも場面または文脈次第で「は」とも訳すことが可能である。場合により日本語では「は」による有題文と解釈することも、中立叙述の「が」無題文と解釈することもできるということである。スペイン語にはそれ独自の主題表示の原則が働いていると考えるべきである。

ところで、今まで取り上げて来た主語の定名詞句は前述の既知項目である。野田（1994a）の主張によれば、不定名詞句は主題とは認められない。しかし、不定名詞句がすべて未知項目であるわけではない。例えば、次のように不定冠詞には総称的な用法がある。

(22) *Un estudiante de medicina debe saber esto.* 医学の学生ならばこのことを知っていなければなりません。(上田, 2011: 89)

(23) *Una mujer honesta es corona de su marido.* 貞淑な妻というのは、夫の誉れである。(Hotta, 1989: 205)

日本語では名詞文（「太郎は学生だ」）や形容詞文（「空は青い」）は「は」有題文となるのが原則である。スペイン語でも連結動詞が介在する属性規定文（*attributive sentence*）は、次のように定名詞句の主題を持つ文になるのが普通である。

(24) *Juan es estudiante.* フアンは学生だ。

17 Hotta (1989) は日本語の「は/が」とスペイン語の冠詞の対応を演劇作品について調査している。

(25) *La ballena es mamífera.* クジラは哺乳類だ。

しかし、総称的な名詞句の場合は、定の例(25)と不定の例(22)~(23)が現れる。総称的な不定名詞句主語が現れるのは属性規定文に限らない。次のような事象叙述文 (predicative sentence) の場合にも出現する。

(26) *Un hombre cauto no acomete empresas superiores a sus fuerzas.* 慎重な人というものは、自分の力にまさる仕事には手をつけぬものだ。(Hotta, 1989: 205)

通常、不定名詞句の主語は、定名詞句同様、主題の意味的要件と分離的要件は満たしていても、情動的要件は満たさないのが普通なので、主題ではない。しかし、総称的な不定名詞句は、形式上は不定でも既知項目に該当し、情動的要件を充足するので、例外的に主題と見なすべきである。

6. 結論

一般に、題説関係を構成する主題は意味的要件、分離的要件および情動的要件で規定することができる。説明的要件とは、主題について説明部分はその状況や属性を説明する関係にあるということである。分離的要件とは主題と説明の間には統語・形態・音韻などの特徴で示された切れ目があるということである。情動的要件とは主題となる名詞句が既知であるということである。表示手段から見ると、日本語には (a) 助詞「は」、(b) 提題表現(「とは、って、なんか」など) および (c) 無助詞による主題がある。(a) と (b) は主題の3要件を満たす典型的な主題を構成するのが普通であるが、(c) は分離的要件を十分満たしているとは言えないので、主題提示の手段としては不完全である。しかし、それによって提示される名詞句が既知の場合は主題と見なすべきである。

一方、スペイン語では (a) 提題表現 (en cuanto a など)、(b) 直接補語および間接補語の左方転移および (c) 主語の動詞前配置による主題がある。(c) は既知名詞句の主語を動詞前に配置するもので、形式上は定名詞句の主語がこれに該当する。しかし、不定名詞句でも、総称的な場合は主題と見なすべきである。主題の表示手段としてみると、動詞前の主語配置は主題も非主題も現れ得るので、日本語の無助詞と似た不完全な表示手段である。

参考文献

- Alarcos Llorach, Emilio, 1994, *Gramática de la lengua española*, Madrid: Espasa Calpe.
- 出口厚美、1984、「スペイン語における主語・動詞・目的語の語順に関する量的考察」、大阪外国語大学『Estudios Hispánicos』10: 1-17.
- Firbas, Jan, 1987、「英語、ドイツ語、チェコ御動詞の伝達機能に関する考察」、徳田裕美子(訳)、千野栄一(編)、『現実分析』、東京外国語大学語件資料7: 27-57.
- Halliday, M.A.K., 1994, *An Introduction to Functional Grammar*, 2nd. ed., London: Arnold.

- Hotta, Hideo (堀田英夫), 1989, «Las partículas japonesa GA/WA y los artículos españoles», 愛知県立大学外国語学部『紀要』21, (言語・文学編): 197-284.
- 福嶋教隆, 2003, 「スペイン語と日本語の主題の対照研究の動向」、神戸市外国語大学、対照研究セミナー、『Clavel』1: 48-58.
- , 2004, 「スペイン語の主題に関する記述的考察」、益岡隆志(編)『主題の対照』、くろしお出版: 129-148.
- 加藤重広, 1997, 「ゼロ助詞の談話機能と文法機能」、『富山大学人文学部紀要』27: 19-82.
- , 2001, 『日本語学のしくみ』、研究社.
- 菊池康人, 2006, 「主題のハと、いわゆる主題性の無助詞」、益岡隆志・野田尚史・森山卓郎(編)『日本語文法の新地平2、文論編』、くろしお出版: 1-26.
- 久野暲, 1973, 『日本文法研究』、大修館書店.
- 黒崎佐仁子, 2006, 「話題提示に見られる無助詞文の条件ニュース見出しを中心として」、『早稲田大学日本語教育学』1: 67-80.
- 益岡隆志・田窪行則, 1992, 『基礎日本語文法』改訂版、くろしお出版.
- Mathesius, Vilém, 1981, 『機能言語学；一般言語学に基づく現代英語の機能的分析』、飯島周(訳)、桐原書店.
- 三上章, 1972, 『続・現代語法序説』、くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会[記述文法研], 2009, 『現代日本語文法5』、くろしお出版.
- 丹羽哲也, 2006, 『日本語の題目文』、大阪: 和泉書院.
- 野田尚史, 1983, 「日本語とスペイン語の語順」、『大阪外国語大学学報』、62: 37-53.
- , 1984, 「有題文と無題文—新聞記事の冒頭文を例として—」、国語学会『国語学』136: 65-75.
- , 1994a, 「日本語とスペイン語の主題化」、日本言語学会『言語研究』、105: 32-53.
- , 1994b, 「日本語とスペイン語の無題文」『日本語スペイン語(1)』、国立国語研究所、83-104.
- , 1996, 『「は」と「が」』、くろしお出版.
- 尾上圭介(編)、2004, 『朝倉日本語講座6、文法II』、朝倉書店.
- Real Academia Española [RAE], 2010, *Nueva gramática de la lengua española, Manual*, Madrid: Espasa Libros.
- , 2010, *Nueva gramática de la lengua española*, Madrid: Espasa Libros.
- 寺崎英樹, 1987, 「スペイン語の不定名詞句主語の語順について」、『東京外国語大学論集』、37: 59-76.
- , 1998, 『スペイン語文法の構造』、大学書林.
- Zubizarreta, María Luisa, 1999, «Las funciones informativas: tema y foco», en RAE, 1999, *Gramática descriptiva de la lengua española*, II, § 64: 4217-4244.

例文資料

- 上田博人, 2011, 『スペイン語文法ハンドブック』、研究社.
- [Salamanca], 1996, *Diccionario Salamanca de la lengua española*, Madrid: Santillana.

Theme and subject of Japanese and Spanish

Hideki TERASAKI

Professor Emeritus, Tokyo University of Foreign Studies

【keywords】 theme, topic, subject, Japanese, Spanish

We suppose that the theme or topic can be determined by three necessary conditions: (1) The semantic condition: the theme is combined by the rheme that explains its situation or attribute. (2) The separative condition: between the theme and the rheme, there is a gap that is marked by syntactical, morphological or phonological features. (3) The informational condition: the theme must be a given NP.

Japanese has three means to mark themes: (a) postposition *wa*, (b) theme-introducing particles such as *towa*, *tte*, *nanka*, etc., (c) null postposition. Of these means, (a) and (b) usually make a typical theme that satisfies all the three conditions, but (c) is an incomplete means for presenting a theme because the separative conation is not fully satisfied. But if the NP marked by null postposition is a given item, it should be treated as theme.

Spanish has also three theme-marking means: (a) theme-introducing phrases such as *en cuanto a*, (b) left-dislocation of direct and indirect objects and (c) preverbal placement of the subject, which should be a given item realized by a definite NP. But if an indefinite NP forms the subject with a generic meaning, it can be treated as theme. To present a theme, the preverbal subject placement is an incomplete means like Japanese null postposition because it can give a not-theme subject as well as a theme subject.

